フリーター問題と統計

上智大学文学部教授
岡　本　英　雄

予　　測

21世紀を迎えて未来予測がいろいろと行われている。将来どうなるかを予測することは難しく，なかなか当たらないものであるが，予測には予測する側の考えが反映しているので興味深い。筆者は30年ほど前に，今後職業構造がどうなるかという予測をしたことがある。量的な予測でなく，方向を考えただけであったので，現在の状態に照らしてもそう間違った予測ではなかった。しかし，フリーターの増加については必ずしも当たっているとは言えない部分がある。定職をもたない人は現在（1970年前後）より増加する，という予測は当たったのであるが，そのあり方が予想と違ったのである。

筆者の予想は，まず価値観がますます多様化することを前提として，多くの収入を求めるのでなく，労働以外の活動に重点を置こうとする人が増えるとした。この時念頭にあったのは，当時欧米，特にアメリカで流行していたヒッピーと呼ばれた人たちや，コンミューンと呼ばれる共同体で暮らす人たちであった。定職をもたないことは，従来のライフスタイルを根本的に否定することだと考えたわけである。ところがヒッピー的な生活様式もコンミューンもその後あまり拡大せずに終わった（もちろんオウムに見られたように根強く残ってはいるが)。

現在のフリーターは定職をもたないのであるが，根本的に現在のライフスタイルを否定しているわけではない。物質文明を基礎とした「快適な」生活を続けたいのだが，職業労働にともなう様々な束縛からは逃れたいとして定職をもたず，アルバイト的な就業を続けていると考えられる。支配的なライフスタイルを否定しているのは，フリーターでなく，むしろホームレスであろう。高い生活水準を維持したまま，働くことにともなう嫌なことはできるだけ避けようというフリーターの生活態度を，身勝手な考えと非難することは簡単である。しかし，このような生活態度や価値観が表れたのはそれなりの理由があるのであって，彼らを非難しても始まらない。厚生労働省や文部科学省は，フリーターの増加は十分に職業観が発達していないことにあると考えて，職業観についての教育指導をより充実させる対策を考えているようである。これも必要なことであろうが，より大きな構造的な問題が存在する。

増加の理由

まず，職業の問題である。職業は社会が必要とするものやサービスを供給するために必要な作業を分担することである。そこには肉体的精神的負荷が常にともなう。大規模化した企業組織は官僚制化が進み，そこでは人は他人と異なる特徴をもつ個人であるよりもひとつの歯車であることを要

求される。自分で判断することを求められるのは一握りの人たちだけであって，多くの人は決められたとおりに行動しなければならない。近代社会は個性を主張することを奨励してきたのに，職業の場でそれを実現することは難しかった。

このように労働が多くの人にとってあまり面白くないことは，ずっと続いてきたことであって，フリーターの増加を説明することにならない。さらに追加的な要因が必要である。それが生活水準の一層の向上である。そう必死になって働かなくても暮らせるようになったのである。フリーターは半分親掛かりの生活を送っているものが多いようであるが，これも親にそれだけの余裕があるということである。これまではつまらなくても生活のために我慢してきた人たちの一部が，何とか生活できそうだから我慢しなくてもいいや，と考えたのである。

こう考えても実はまだフリーターの増加を説明できない。生活水準はこのところの長期にわたる不況で停滞したままであるのに，フリーターが増えているからである。そこで登場するのが，階層的な上昇の可能性が消えたという要因である。これまでの日本の社会は上昇するチャンスに恵まれていたから，地道に働いていれば上の階層に行ける，あるいは自分は行けなくとも子供が行けるという希望があったので，あまり面白くない労働に耐えてきた。ところがその希望がついえてしまったので，人々は我慢して働くことに嫌気がさしてきたのではないかというのである。

統計の役割

この説明が正しいためには，少なくとも「上昇のチャンスが減少した」ことが確認されていなければならない。ところが，ある社会で上昇のチャンスがどれだけあるかを測定する方法については長年の論争があり，一定の方向が見えてきているといっても研究者の意見が完全に一致したわけではない。現に，近年の日本社会の上昇あるいは下降移動のチャンスの大きさについて研究者の意見は対立している。統計的なデータは客観的なようにみえるが，ある考え方にもとづいて計算式がつくられ，それによって算出されているので，ある現象の測定方法がひと種類しか存在しないわけではない。統計データを扱う研究者はこれまで，その統計データの性格について一般の人々に説明することにあまり力を注いでこなかったように思われる。そのため，一般の人は対立するデータがでてくるとびっくりしてしまう。統計そのものに不信をもたれることになりかねないのである。まず，基礎的なデータを確定しないと議論が進まないのであって，統計はそこで重要な役割を期待されている。

もっとも，フリーターの件では別の問題がある。フリーターを調査した報告書を読んでみると，フリーターには２種類あるようなのである。ひとつはもちろん上で述べたようなフリーターであるが，地方都市などに多いタイプは単に就職先が見つからず，やむをえずフリーターとなっているタイプであって，この場合は職業観などの問題ではない。全く内容が違ったものに同じフリーターという言葉を当てているので，議論がさらに混乱するわけである。違うものには違う名称を与えて区別して数えることは統計の基本であろう。